震災報道考える

水戸でシンポ　映画や討論通じ

東日本大震災の発生から千日目の4日、「震災とマスコミ報道」に関するシンポジウム（茨城大人文学部主催）が水戸市文京の茨城大で開かれ、ドキュメンタリー映画上映やパネルディスカッションなどを通じて、学生や一般県民約200人が震災報道の在り方について考えた。

シンポジウムは3部構成で、1部では福島県双葉町出身の同大社会科学科4年、小野田明さんが、福島第1原発事故で避難を余儀なくされた同町民の現状を記録した映画「ある町」を上映。小野田さんは「故郷について考え直したのが映画製作のきっかけ。住民の故郷への思いを伝えたかった」と説明した。

2部では、元NHKアナウンサーで、市民投稿型映像ニュースサイト「8bitNEWS」代表の堀潤さんが講演。同原発作業員の男性からの内部告発を同サイトで取り上げた経緯を明かし、「マスメディアがカバーしきれない現場も市民一人一人の発信により、問題解決の早期化が図られることが期待される」と強調した。

最後に小野田さん、堀さん、前東海村長の村上達也さん、茨城新聞社の松下倫記者によるパネルディスカッションがあり、村上さんは「『リメンバー3・11』が大切。マスコミは視聴率や販売部数に左右されず、つらいけれど忘れないとの視点から報道し続ける姿勢が必要だ」と訴えた。

村上達也前東海村長（中央）らが参加したパネルディスカッション＝水戸市文京の茨城大